



TITLE:

虚字考

AUTHOR(S):

青木, 正兒

---

CITATION:

青木, 正兒. 虚字考. 中國文學報 1956, 4: 98-107

ISSUE DATE:

1956-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/176624>

RIGHT:

著作権保護期間満了のため公開

# 虚 字 考

青 木 正 兒

山 口 大 學

私は東北大學に在職中、多分昭和の始頃であつたと思ふが、同僚の山田孝雄先輩から質問を受けた。謂ふ、我が應仁年間の國文法書に既に實字虚字の論が見えてをり、多分支那から傳はつた説と考へるが、支那では何時頃から此の説が現れてゐるか。是は難問である。即答は出来なかつたけれど、氣を付けてゐると案外手近かな南宋の詩話の中に二つばかり見付かつたので報告した。山田氏は喜んで、其の著書の資料に用ゐられた。私も其後拙文「詩文書畫論に於ける虚實の理」(昭和十七年「支那學」小島本田二博士還曆記念號)の中に於て大略此の問題にも言及した。然るに近頃學生の爲に助辭用法を講ずるに方り、聊か考を纏めて見たし、

楊樹達の如き文法専門の大家も虚字に就いては認識不足なることを知つたので、今拙文を徵せられたるを機として、草稿を公開することとした。

抑も虚字實字の説は宋代の詩論に發したもののやうである。其の詩話の類に見え始めたのは、管見の及ぶ限り南宋以後のこととて、まづ其の初期の楊萬里の「誠齋詩話」に曰ふ、

詩有<sub>二</sub>實字<sub>一</sub>而善用<sub>レ</sub>之者<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>實爲<sub>レ</sub>虚。杜云「弟子貧<sub>三</sub>

原憲<sub>一</sub>、諸生老<sub>二</sub>伏虔<sub>一</sub>。」老字蓋用<sub>二</sub>趙充國請<sub>レ</sub>行<sub>一</sub>、上

老<sub>二</sub>之<sub>一</sub>。」

按するに漢書、趙充國傳に云ふ、時充國年七十餘、上老之。

蓋し「貧」「老」二字はもと實字なるも、之を「貧トス」「老トス」と虚字に轉用せるの妙を謂つたのである。

然らば實字虚字の別は如何に。南宋末期の范晞文の「對牀夜語」卷二、及び魏慶之の「詩人玉屑」卷三唐人句法の條に示された實例によつて理會することが出来る。「對牀夜語」には五言律詩の聲律を論じ、第三字目、即ち「眼」に拗字を下して奇趣を出すことの妙を説き、杜甫の詩句を擧げて之を例證してゐる。其の眼に「實字を用ゐて拗する」

ものと「虚字を用ゐて拗する」ものと有り、まづ實字を用ゐた例は、

乾坤萬里眼、時序百年心。』梅花萬里外、雪片一冬深。』  
一逕野花落、孤村春水生。』蟲書玉佩蘚、燕舞翠帷塵。』  
村春雨外急、隣火夜深明。』山縣早休市、江橋春聚船。』  
老馬夜知道、蒼鷹飢著人。』

此れに據れば「萬」「百」「一」等の數詞と「野」「春」「玉」「翠」「雨」「夜」「早」(あき)「飢」(?)等の名詞を以て實字と爲すことが知られる。猶ほ「詩人玉屑」の「眼に實字を用う」の項に列舉する所の句例に就いて「眼」(原書、眼用活字の下に註に云ふ、五言以第三字爲眼、七言以第五字爲眼)の文字を摘出すれば、

人、鳥「春、夜」秋、夜「波、雨」碑、畫「蟬、鴈」書、酒「風、角」雲、雨「

右の如く皆名詞である。次に「對牀夜語」に「虚字を用ゐて拗する」ものとして舉げた例は

行色遞隱見、人烟時有無。』蟬聲集古寺、鳥影度寒塘。』  
簷雨亂淋幔、山雲低度牆。』飛星過水白、落月動沙虛。』

虚 字 考 (青木)

此に據れば「遞」「時」「亂」「低」の如き副詞と、「集」「度」「過」「動」の如き動詞とを以て虚字と爲すことが知られる。更に「詩人玉屑」の「首に虚字を用う」の項に列舉する所の句例に就いて句首の字を見るに、

無風……、不夜……。』無人……、多雨……。』以吾……、憐爾……。』出關……、傍水……。』到江……、隔岸……。』似煖……、無聲……。』載酒……、思人……。』無邊……、不盡……。』但將……、不用……。』  
「憐」「出」「傍」「到」「隔」「載」「思」の如き動詞の外に、「多」は形容詞、「不」「但」は副詞、「以」は前置詞、「無」「似」は同動詞と見なされるであらう。つまり實體の備はれる名詞と數詞とを實字とし、その作用を現はす動詞、及び其等の意義を補助する形容詞・副詞・前置詞・接續詞など、實體無き空虚なる言葉を虚字としたわけである。

さて虚字には作用を現はす言葉と、其の意義を補助する言葉と、二種有ることが氣付かれてゐた。前者を「虚活字」と名づけ、後者を「虚死字」と呼んだ。つまり前者は作用

が有るから活きてをり、後者は作用が無いから死んでゐると見なしたのであらう。「對牀夜語」に「虛活字は極めて下し難し、虛死字は尤も易からず。蓋し是れ死字と雖も、之をして活かしめんと欲す、此れ難しと爲す所以なり」と説いて、杜甫の詩に就いて虛死字を下して妙を得た句例を擧げてゐる。是もやはり「眼」即ち第三字目に就いて論ずるのである。即ち

古牆猶竹色、虛閣自松聲。江山有巴蜀、棟宇自齊梁。  
入天猶石色、穿水忽雲根。江山且相見、戎馬未安居。  
故國猶兵馬、他鄉亦鼓鼙。地偏初衣袷、山擁更登危。  
詩書遂牆壁、奴僕且旌旆。

此に虛死字と爲す所の「猶」「自」(おのづから)は副詞であり、「有」「自」(よりず)は同動詞、「猶」「忽」は副詞、「且」「未」も「猶」「亦」も「初」「更」も「遂」「且」も、まづ副詞と見なし得るであらう。然らば虛活字は如何に。其れは「詩人玉屑」唐人句法の條、「眼に活字を用う」の項に句例が擧げられてゐる。此に謂ふ所の「活字」は蓋し「虛活字」の略稱であらう。其の眼の活字のみ

を拾ひ出すと、

燃、擣。「移、禁。」入、富。「留、助。」妨、見。「驚、覆。」消、歛。「開、蕩。」分、送。「嬌、妬。」

かやうに皆動詞のみである。此の區別は明確であり、合理的である。之を要約すれば實字は名詞を主として形容詞中の數詞のみが之に加はり、虛活字は動詞、虛死字は副詞・形容詞・前置詞・同動詞其他の助辭を含むのである。是は詩語に就いて論ぜられてゐるけれども、推廣めて一般の文法に及ぼすとしても、品詞の分類は此の三分法を以て盡すことが出來よう。故に虛字に此の二種あることの發見は、文法學上の一進歩と謂ふ可きであるが、然し普通には區別なく、ただ「虛字」と呼んでゐた。本篇の冒頭に引用した「誠齋詩話」の説は、「貧」「老」二字はもと名詞なるも、此に其れを「貧しとす」「老たりとす」の意として動詞に轉用したことを「以實爲虛」と云つてゐるのであるから、是は虛活字に就いての説である。また韓愈の「送幽州李端公序」の文中「弓韋服」の語に宋の朱熹は註して、韋も服も皆弓室(弓の容器)であるが、然し之を詩經の用例に

徴すれば「轡」の字は又通じて虚字と作して用ゐ可し。此の「弓轡服」とは、弓を服に納むるを謂ふのみ」と曰つてゐる。此に朱子が謂ふ所の虚字も名詞を動詞に轉用したのであるから、やはり虚活字である。次に南宋末期の張炎の「詞源」卷下の「虚字」の條には、詞に慣用せられる虚字の例を列擧してゐるが、單字の例としては「正・但・甚・任」の類を、兩字の例としては「莫是・還又・那堪」の類を、三字の例としては「更能消・最無端・又却是」の類を出してゐる。此の中「正」「但」「莫是」「最無端」の如きは副詞と見なさるべく、「任」「那堪」「更能消」の如きは助動詞と見なさるべく、「還又」「又却是」の如きは接續詞と見なさるべく、是等はつまり虚死字を擧げたのである。かくの如く此の兩種を區別なく單に虚字と呼ぶところからして、後世混亂と誤解とを生じた。其れは後條に説くこととする。

さて、そこで虚字と助辭との關係に就いて一考して見る。助辭に關しては管見に入れる限り、北齊の顔之推の「顏氏家訓」音辭篇に此の術語が見えてゐるのが最も早い。其れ

虚字考（青木）

は「焉」の字の音に就いて晉の葛洪の「要用字苑」の説を引いて、「若し何と訓し安と訓すれば當に音は於愆の反なるべく、若し送句及び助詞ならば當に音は於愆の反なるべし。」と云ひ、送句の例として「故稱龍焉。故稱血焉。」馬、坤「有民人焉。有社稷焉。」文、坤「有民人焉。有社稷焉。」先、坤論語を擧げ、助詞の例として「託始焉爾」公羊傳「晉鄭焉依」左氏傳を擧げてゐる。今、例を以て判斷すれば「送句」とは句末に用ゐられる助辭を謂ひ、「助詞」とは句中に用ゐられる助辭を謂ふ。猶ほ梁の劉勰の「文心雕龍」章句篇に「乎哉矣也、亦送末之常科。」と有り、「送句」は亦「送末」とも呼ばれたのである。然るに後世に至つては此の送句を却つて助辭と稱してゐる。即ち唐の柳宗元の復杜溫夫書に、溫夫の文を非難して「但見生用助字不當律令……所謂乎歟邪哉夫者疑辭也。矣耳焉也者決辭也。今生則一之。」と云つてゐる。此に擧げてある字は主として句末に用ゐられる助辭で、六朝人の所謂送句もしくは送末に屬することは言ふまでもない。時代は降つて南宋初期の陳騭の「文則」三卷の中に若干助辭の法に觸れた説が有る。卷上に「文有助辭、

猶禮之有儀、樂之有相也。」云々として、先秦の文より助辭の用例を十數句出して其の法を示してゐる。其の舉例を見ると、柳宗元が擧げた句末の助辭のみならず、之に加ふるに「其」「乃」「以」「之」などを出してゐる。即ち代

名詞（其）接續詞（乃・之）前置詞（以）を助辭の範圍に入れてゐるわけである。更に卷下に「文有數句用二類字、所下以壯文勢、廣文義也。」云々として、用例を多く擧げて其法を論じてゐるが、此に「一類字」とは主として助辭を念頭に置いて論じてゐるやうである。其の用例に擧ぐる所は「其・之・乃・以」「焉・也・矣」の如き上卷に於て明らかに助辭と認めてゐる字の外に、「或」「者」「謂」「可」「可以」「必」「無」「而」「而不」「于時」「實」「曾是」「未曾」「斯」「有」「兮」「則」「然」「方且」「足以」「曰」等の例を擧げてゐる。多分是等も助辭と見なしたものと推定される。果して然らば此の書に至つて助辭の範圍が著しく擴張されたことになるが確定は出来ない。次に明代に至つて盧以緯の「助語辭」二卷の専門書が出現した。其の中に解説してある助辭の數は「文則」中の字よ

りも多く廣く、而も其れは助辭と確認されてゐる。更に清代初期の劉淇の「助字辨略」五卷に至つては非常に擴張されて、名詞動詞の外は何も彼も助辭の範圍に入れられた觀を呈してゐる。

ところで此時一方に袁仁林の「虛字說」一卷や張文炳の「虛字註釋備考」六卷と云ふやうな「虛字」の解説を標榜した著書が現はれ、近時に及んでも裴學海の「古書虛字集釋」の如く「虛字」と銘打つた著書が爲されてゐる。而して其等の取扱つてゐる語辭を觀察するに、「助字辨略」の範圍と大差は無い。是はつまり此の一派の著者は「虛死字」を稱して「虛字」と爲してゐるからで、何の矛盾も不思議も無い。かくの如く助辭と虛字との文法的研究は全く異なる系統を辿つて發達して來たのであるが、虛字を活と死とに分類することに因つて、其の一半は助辭と一致することになつたのである。故に此間に至つては「虛字」と云ふも、「助字」と云ふも、場合によつては全く同義に解せられるやうになつたらしい。「助字辨略」の著者の場合の如きが其れて、著者は「助字」を辨ずると標題して、其の自

序には冒頭に「構文之道、不<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>實字<sub>一</sub>。虛字<sub>二</sub>兩端<sub>一</sub>。實字其體骨、而虛字其性情也。」云々と確論を吐きながら、助字に就いては何等述ぶる所は無い。而して助字を三十に類別した中に「實字虛用」の一項が有り、例として「吾今召<sub>レ</sub>君」の「今」、「時見<sub>二</sub>理出<sub>一</sub>」の「時」の如きが是れてであると謂つてゐる。「今」「時」いづれも名詞を副詞に轉用したものであり、虛死字である。虛死字は助字と一致する。更に篇末に本書の文字の選擇について述べ、「虛用を取るを目的とするので、之を往と訓し、而若を汝と訓するの屬は、虛字ではあるが、猶ほ實字のごとくであるから悉く載せない」と謂つてゐる。彼の謂はゆる「助字」は虛死字であつて、本書は虛死字を採集して辨ずることを主旨としたのであつた。

かくの如く虛字と助字との名稱が混同してしまふと不便な場合が起る。そこで我國に於ては系統の異なる助字虛字の二説を折衷して、合理的な品詞の分類が立てられて來た。先づ伊藤東涯の「操觚字訣」男塾編輯、實  
曆十三年善語序には助字・語辭・虛字・實字の四分法を取つた。東涯には別に「助辭考」享保元  
年刊

虛 字 考 (青木)

の著が有つて、其れに採つてゐる字は柳宗元の謂はゆる助字、即ち句末の助辭を主としてゐる。それで其他の助辭を「語辭」としたのである。「操觚字訣」の字例に曰ふ、

凡文字、而於乎哉ノ類ヲ助字トイフ。文章ノテ、ニハナリ。嗚呼如何稍亦ノ類ヲ語辭トイフ。文章ノコト、バ字也。命ズル、見ル、行クノ類、ハタラキニナル字ヲ虛字ト云。天地日月命令ノ類ヲ實字ト云。ソハカ、チアルモノナリ。

是は簡にして要を得た説明である。ただ助字と語辭との境界が曖昧であるが、助字は句末の助字に若干接續詞前置詞中の或物を加味したものらしく、語辭は副詞・助動詞・前置詞・接續詞・感嘆詞・代名詞を含む。虛字は虛活字であり、動詞である。實字は名詞である。他に雜字の項を設けて虛字實字の補遺としてゐる。是より先、京都の毛利貞齋が明の盧以緯の「助語辭」二卷に詳細な頭註を施して天和三年に刊行し、享保二年に重訂して再板してゐる。是が我國に於ける助辭研究の端緒を開いたものと思はれる。蓋し東涯は是を參考して助語辭を助字と語辭とに分けたもの

らしいが、然し其の區分の立て方は十分でなかつた。

東涯と同時代に江戸の荻生徂徠がやはり文法の研究に留意した。彼も品詞の分類を論じてゐるが、時によつて説を異にし、また獨創の説が多い。其の「譯文筌蹄」正徳五年刊の題言に「是編有形。狀。字面、有。作。用。字面、有。聲。辭。字面、有。物。名字面。詩家所謂虛。實。死。活。即是物也」と云つてゐるが、彼が定むる所の四種の字面と、詩家の謂ふ所の虛實死活との配當は示されてない。蓋し作用字面は動詞であつて、虚字に當り、物名字面は名詞であつて、實字に當るであらう。形狀字面は形容詞らしく、聲辭字面は助辭らしいが、其等と死字活字との配當は推定できない。また其の「訓譯示蒙」刊詳卷一には字品を「虛實正助」の四種と爲す説を述べてゐる。其の説を要約すれば、虚字に動と靜と有り、動の虚字とは「喜怒哀樂、飛走歌舞」の類であり、靜の虚字とは「大小長短、清濁明闇」の類である。實字に體と用と有り、「天地日月、鳥獸草木」等は體であり、「手足頭尾、枝葉根莖」等は用である。而して虚字實字ともに正であり、助は正の助けになるもので、「之乎者也矣焉哉」の類の助語

である、と云ふのである。此の説は虚字を動（動詞）と靜（形容詞）とに分け、實字を體（總名）と用（部分名）とに分け、是等を助くるものが助語（助字）であるとするのであるから、結局虚字・實字・助字の三分説に外ならぬ。

次に彼は死字・活字に就ても獨創の説を立ててゐる。即ち同書に曰く、

死活ト云ハ、タトヘバ清ノ字、字ノマmanaレバ「キヨシ」トヨム。死字ニスルトキハ「キヨキ」トヨム。活字ニスルトキハ「キヨム」トヨム。歌ノ字、字ノマmanaレバ「ウタフ」トヨム。死字ニスルトキハ「ウタ」トヨム。活字ニスルトキハ「ウタハシム」トヨム。舞ノ字、字ノマmanaレバ「マフ」トヨム。死字ニスルトキハ「マヒ」トヨム。活字ニスルトキハ「マハス」トヨム。餘ハ例シテ知ルベシ。

要するに死字は或る字を名詞（ウタ。マヒ）形容詞（キヨキ）に用ゐる場合、活字は其れを他動詞（キヨム。ウタハシム。マハス）に用ゐる場合としてゐるのである。是は彼が勝手に考へたことで、何等根據の有る説ではない。已に論證した



如く、活字すなはち虚活字は動詞であり、他動詞と限らない、死字すなはち虚死字は助辭であり、名詞形容詞と關係はない。彼が「譯文箋諦」の題言に於て「詩家所謂虚實死活即是物也」と云つて、是物の何物なるかを示さなかつたのも、畢竟「死活」を正解し得なかつたからであらう。然し彼が一たび獨斷の説を爲すや、宇野士新の「文語解」の如きも此説を奉じてをり、其説が所々に散見する。例へば「無ノ下ハ體用死活虚實ノ字ヲエラマズ。莫ノ下ハ必用ナリ、活ナリ、虚ナリ。」（卷一）「岡ナシレニ晝夜ニ領領。岡ニ水行レ舟益カヤウニ死字ノ上ニ置クコト他文ニハ見ズ。」（卷一）是は名詞を死字と爲す徂徠の説に従つてゐるのである。「コノ字（突の字を指す）伯也。回也。ノゴトク死字ノ下ニハ用ズ。茲惟后突。孺子王突。並ニミナ活シテ用ユ。」（卷五）「伯」「回」は固有名詞で死字、「后」「王」は名詞を動詞に用ゐたから活字となつたとするので、徂徠の説に本づくこと明らかである。

其後半世紀を経て京都に皆川淇園が現はれ、文法の研究と啓蒙とに力を盡し、此の方面の著書を多く出した。彼は

# 虚 字 考（青木）

其の著を質字・虚字・助字と別冊にして刊行した。「質字解」六卷寛政三年刊「虚字解」二卷天明二年刊「續虚字解」二卷寛政四年刊「助字詳解」卷數及刊年未詳「虚字詳解」十五卷未刊「左傳助字法」三卷明和六年刊「詩經助字法」「史記助字法」二書並に淇園文話に名を出す未見かくの如く淇園に至つて實虚助の三分法が確立した。東涯の四分法も助字と語辭とを合併すれば三分法に歸するわけであるし、徂徠の「虚實正助」説も實質は三分法である。其等を整理したのが淇園の功績であり、日本人の頭の良さを支那人に誇示するに足るであらう。支那では虚活字も虚死字も虚字と呼んでをり、其のため虚字が助字と同義に用ゐられるので（袁仁林の「虚字説」張文炳の「虚字註釋備考」の如く、混雜して不整頓の觀あるを免れない。然るに日本では虚活字のみを虚字と稱し、虚死字は之を助字と稱するため、秩序整然として聊かも混亂を覺えないのである。推察するに我國に「助辭」といふ術語が根を下ろしたのは盧氏「助語辭」が翻刻されて通行した影響であるらしい。淇園の著書以外に助辭を以て標題とする書を私の藏書だけ並べて見ても、岡白駒の「助辭通」三卷寶曆二年序河北景楨の

「助辭鵠」五卷<sup>安永五</sup> 谷鸞の「谷氏助字解」三卷<sup>天明五</sup> 津敏の「助字辨法」四卷<sup>文化六</sup> 三宅橘園の「助語審象」三卷<sup>文化十</sup> 介石の「助字鑿」八卷<sup>文久元</sup> 小幡儼太郎の「類聚助語二百義」九卷<sup>明治二</sup> 十<sup>年刊</sup>を數へることが出来る。是等はつまり虚死字の研究である。虚活字の研究は東涯・徂徠・淇園の著書の外には松本愚山の「譯文須知」前集虚字部五卷<sup>文化五</sup>を見ろのみである。

眼を轉じて再び支那を見るに、清朝末に現はれた馬建忠の「馬氏文通」<sup>光緒二十</sup> 正名篇に、實字虚字の定義を下して曰く「凡字有<sup>二</sup>事理可<sup>レ</sup>解者曰<sup>二</sup>實字<sup>一</sup>、無<sup>レ</sup>解而惟以助<sup>二</sup>實字之情態<sup>一</sup>者曰<sup>二</sup>虚字<sup>一</sup>」と。而して實字は名・代・動・靜(形容詞) 狀字(副詞)の五類とし、虚字は介字(前置詞) 連字(接續詞) 助字(句末の助字) 嘆字の四類とした。是は學理上合理的であるかも知れぬが、傳統を無視した獨斷の説である。しかのみならず曾國藩が復<sup>二</sup>李眉生<sup>一</sup>書の中に「實字虚用」「虚字實用」といふことを論じて、實字虚用とは「春風風<sup>ス</sup>人、夏雨雨<sup>ス</sup>人、解<sup>レ</sup>衣衣<sup>ス</sup>我、推<sup>レ</sup>食食<sup>ス</sup>我」などの如きである、虚字實用とは韓愈の文の「歩<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>新船<sup>一</sup>」

詩經の「國歩」「天歩」と曰ふが如きであると例示してゐるのを非難して、「是以<sup>二</sup>動字<sup>一</sup>爲<sup>二</sup>虚字<sup>一</sup>者也。然若<sup>二</sup>焉哉乎也<sup>一</sup>諸字、不<sup>レ</sup>知會氏將<sup>二</sup>何以名<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>。」ときめつけてゐる。且又「讀<sup>二</sup>王懷祖(念孫)段茂堂(玉裁)諸書<sup>一</sup>、虚實諸字、先後錯用、自無<sup>二</sup>定例<sup>一</sup>、讀者無<sup>レ</sup>所<sup>二</sup>適從<sup>一</sup>」と、鼻息は頗る荒い。是は彼が虚字に死活の別有るを知らなかつたからで、會氏の説く所は虚活字であつたわけである。王念孫・段玉裁の著書に「虚字」なる術語を如何様に用ゐてゐるかは知らないが、必ず傳統的なる用法をしてゐたことであらう。恐らく其れが時として虚活字を意味したり、或は虚死字を意味したりするので「自無定例」と感じられたわけであらう。

然し馬氏が獨斷の見を以て實字虚字の分類を立ててから、民國以來新式文法を編するものは往々此の説に本づいてゐるやうである。例へば楊樹達の「中國語法綱要」<sup>民國九</sup> 年刊の詞類表には(一)實字——名詞・代名詞・動詞・形容詞(二)半虚半實——介詞・連詞(三)虚字——助詞・歎詞としてをる。戴涓清の「國語虚字用法」には「半虚半實」を設けないばかりで、他は楊氏と同一である。一たび馬氏の新説を妄信し

てからは、其後十年を経て楊樹達が「高等國文法」（民國十年刊）を出  
すに至つても猶ほ虚字に正解を得てゐない。其の第一章「文

法學之歷史觀」に於て「虚實之區別、頗無定説」と歎して、

清儒の用例の矛盾を指摘してゐる。其れは薛傳均の「説文

答問疏證」卷五に「説文、（ナ）舌貌。徐鍇繫傳云『人舌

出西<sub>ナ</sub>然。西爲<sub>ナ</sub>舌貌。故即以<sub>ナ</sub>舌<sub>ナ</sub>爲<sub>ナ</sub>西<sub>ナ</sub>。』此古人反<sub>ナ</sub>

實<sub>ナ</sub>字<sub>ナ</sub>爲<sub>ナ</sub>虚字<sub>ナ</sub>之例也。』と有るを擧げて、「薛氏は西の字

が舌の出る形容を意味する場合を實字とし、舌を以て物を

話るを意味する場合を虚字としてゐるから、是は形容詞を

以て實字と爲し、動詞を以て虚字と爲すのである。然るに

曾國藩が李梅生に答へた手紙に、春風風<sub>ナ</sub>人、夏雨雨<sub>ナ</sub>人、

……諸句の中二字目の風・雨などを實字虚用と謂つてゐる。

是は動詞を虚字と爲すは薛氏と同じであるけれど、しかし

實字は名詞を謂つてゐる。また薛氏は活字といふ名目も用

ゐてゐて、それは動詞を指して言つてゐるのである（疏證

卷一豐字のところ、卷三豫字のところに見えてゐる）、然らば又

其の動詞を虚字と爲す説と相矛盾する」と疑つてゐる。是

も楊氏が虚字に死活の別ある古傳を知らないから、此の謎

が解けなかつたのである。薛氏が謂ふ所の「活字」は虚活  
字の略稱で、固より其れは動詞なのである。

（昭和三〇、一〇、二〇）